

植民地朝鮮における博物館・博覧会・観光

— 1910-1930を中心に —

中 江 桂 子

- 1 はじめに — エキシビションと権力の複雑な関係をたどる —
- 2 朝鮮における近代ミュージアムの成立
- 3 朝鮮と博覧会 — 博覧会の多様性とその意味
- 4 植民地朝鮮の観光地と旅
- 5 帝国と植民地 — 関係の多様性とエキシビション

1 はじめに — エキシビションと権力の複雑な関係をたどる —

近代のまなざしが社会に浸透していく歴史のなかでは、どう見るか／どう見られるかという視線へのコントロールが、政治的・文化的支配と関わっていくのは避けられない。科学的な指標のもとに世界の多様性を比較展示し、評価判断をしていくという近代意識のもとに、近代意識の所有者としての帝国が主体となって、他の世界を展覧し評価する。この行為のもとにある博物館や博覧会といったシステムは、社会の支配構造あるいは支配の正当化の問題と必ず重ね合わされて論じられてきた。また、この帝国の視点を、開発を道具として社会の再創造に結びつけ、産業化しようとするのが観光であるともいえよう。本稿で扱おうとしている1910-1930の植民地朝鮮を取り上げるならば、博物館・博覧会・観光といった近代のまなざしの構築は、大日本帝国の支配を正当化するために帝国の必要と経済のために利用されたということと、朝鮮への剥奪と歴史問題と、それらをセットとして論じられてきたのである。しかし、確かに帝国的支配という利用があったとしても、その型を一度は離脱して歴史の再認識を

試みる複眼的視点を持つことの可能性までを、手放してはならないだろう。

とくに、植民地朝鮮における博物館と博覧会は、欧州あるいは日本内地のそれとは、区別すべき特徴がある。それは朝鮮すなわち植民地内におけるものだったことだ。帝国の中心が、自らの支配のもとに得た植民地の人間や産物を帝国の力の証として展覧するというのは欧州をはじめとして普通にみられるが、朝鮮ではそうではない。朝鮮は、植民地内の人々自ら「植民地内において博覧会を開催した経験」¹⁾をもつ。また、博物館や観光についても、内地—朝鮮関係の固有の時代状況や経済状況のなかから育成されたことによる特徴をもつと考えることができる。

本稿は、帝国／植民地、収奪する側／収奪される側、見る側／見られる側、進んだ側／遅れた側、という対立項を重ね合わせてしまう私たちの先入観を、まず警戒することを基本姿勢とする。そのうえで、1910年から1930年を中心とした時代の日本と朝鮮の関係をとらえ、そのなかで成立する博物館、博覧会、観光という事象をとりあげながら、エキシビションと権力の交錯のありようについて、具体的に考えていこうとするものである。1910-1930という時代をとりあげるのは、1910年は日韓併合の年であり総督府の政治権力が公的に成り立った年であり、1930年以降は日本の軍事的状況が悪化して、日本内地でも朝鮮でも、あらゆるものが戦争を中心に強力な磁場にさらされていくためである。この間の期間、朝鮮では総督府が武断政治から文化政治へと転換するなどいろいろあるのだが、いずれの政治体制の中でも、博物館・博覧会・観光への事業は継続され、朝鮮社会に大きな影響を与え続けてきたといえよう。

1) 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、2008年、3頁。大英帝国が植民地インドやオーストラリアで博覧会を開催した事例は存在する。しかし、植民地朝鮮における博覧会は、宗主国とは関係なく植民地内の社会勢力が実現したものである点に特徴がある。

2 朝鮮における近代ミュージアムの成立

朝鮮半島において近代制度としてのミュージアムが成立したのは、大日本帝国下においてである。博物館・美術館の成立が日韓併合時代を中心に日本によって進められた経緯があるため、これらは、文化事業全般を帝国支配の手段とするステレオタイプで一括して批判され、その価値を否定するという言説にさらされ続けてきた歴史がある。ここでは繰り返されてきた陥穽に陥らないように注意しつつ、吟味の対象としたい。

朝鮮半島における近代的博物館開設への前史として、岡倉天心が積極的に朝鮮総監伊藤博文や寺内正毅らに進言したことの影響があったとされる²⁾。伊藤が総理時代、天心は伊藤のもとに頻繁に通い、日本は外国の美術ばかりに目をやるのではなく日本の芸術の本来の姿を見極め、伝統を極めてその興隆を図る必要があることを説き、博物館設立を進言した。それを理解した伊藤は帝国博物館の創設に尽力し実現した。もともと天心の考え方は、廃仏毀釈とともに始まった明治近代の流れとは一線を画すものであり、しかもアジアの一等国として拡大していこうとする政治的アイデンティティとも異なる、天心特有の感受性のもとにあった。天心はアジアそのものの多様性を尊重する東洋の民主主義をめざした。しかしその帝國的ナショナリズムへの懐疑が原因となり、やがて天心は皇室博物館美術部長やパリ万博へ出品予定の『稿本日本帝国美術略史』の編纂から追放されることになったほどである。そののち伊藤が朝鮮総督になって来鮮してからは、岡倉天心は朝鮮美術の復興に力を注いだことが知られている³⁾。伊藤もまた政府内部のなかで韓国併合にたいして最後まで異を唱えた人物

2) 本稿における岡倉や伊藤の思想および初期の博物館、のなかでも特に柳宗悦を中心とした論考の部分に関しては、中江桂子「工芸家たちの「もう一つの近代」 奥野・中江編『メディアと文化の日韓関係—相互理解の深化のために—』新曜社、2016年、28-49頁、の一部分を下敷きに、本稿の目的に合わせてスリム化しつつ大幅に改稿したものとなっている。

3) 浅川伯教「朝鮮の美術工芸に就いての回顧」和田・藤原編『朝鮮の回顧』近澤書店、1945年、265-260頁。

であり、朝鮮の歴史と朝鮮の人びとの文化的才能に畏敬をあらわすことを厭わなかった、頑固な人格が伝えられている⁴⁾。寺内が二代朝鮮総督になると、ふたたび岡倉天心は来鮮し、寺内に朝鮮における博物館の設立や古跡調査などの必要性を説いた⁵⁾。

(1) 李王家博物館

そのような岡倉の運動の直接の結果かどうか不明だが、日韓併合前、韓国総監府時代の1908年に博物館として開館した昌慶宮内帝室博物館（1910年李王家博物館へ名称変更）は、李王朝の宝物を保存する場所として総監府によって整えられた。伊藤博文統監は、李王家にたいする宮中の肅清を進めながらも、「一面には宮廷としての尊厳を保たしめ王者の恩恵を庶民に垂れねばならぬとの意見で、宮殿の造営と、博物館、植物園、動物園の新設を進言せられ……李王殿下は大なる満足で之を容れられた」⁶⁾。博物館の開館によって、それまで決して目にすることが許されていなかった王朝の歴史的遺物を朝鮮の人びとは目にすることになったのである。この博物館のまわりには動物園や遊園地もつくられ、娯楽に乏しかった当時の朝鮮の人びとは、昌慶宮とその庭園にごった返したという⁷⁾。これは、さながら小さな博覧会だったといつてのよいだろう。

またこの博物館は来鮮する歴史家や美術家たちにとって、得難い勉強の場と

4) 新渡戸稲造「偉人群像」『新渡戸稲造全集』第5巻、教文館、1970年、548-551頁。

5) 浅川、前掲書、265-270頁。

6) 権藤四郎介『李王宮秘史』朝鮮新聞社、1926年、4頁。

7) 無署名「王の居所を遊園地とみなした日本」中央日報日本語版、2020年11月26日掲載記事。動物園等のかつての賑わいについての報告がある。

全の研究によれば、李王家博物館所蔵品の約4割程度は、一般の展覧に供するため総監府時代以降に、新たに蒐集・購入されたものであった。全東園「『朝鮮文化財』研究の成立と言説空間の形成—韓国文化財形成過程に関する史的研究」博士学位論文（東京外国語大学）、2017年、204-208頁。さらに、大韓帝国宮廷における日本人官吏であった井上雅二は、博物館だけではなく動物園や植物園までも、娯楽の少ない大韓帝国の臣民が有益なる知識を広め、無限なる趣味を鼓舞するためには必要だと述べている記録が紹介されている。全東園、前掲論文、193-194頁。



昌慶宮苑内博物館（最初の李王家博物館）

（絵葉書資料館蔵）



昌慶宮苑内動物園

（絵葉書資料館蔵）

なったことは言うまでもない。浅川伯教は、1913年にはじめて来鮮すると李王家博物館を頻繁に訪ねている。そこにあった如意輪観音に東洋のミロのヴィーナスを見てとると、それは「心に巖肅な崇敬の念を呼び起こす。支那の六朝時代、朝鮮の三國時代、我が國の飛鳥時代、この佛像を通してこの三時代のつな

がりを雄辨に聞く事が出来る』⁸⁾、と感激しているし、同様の感激は高麗青磁のコレクションを目にしたときにも繰り返されている。のちに李朝窯の調査研究と陶片の収集をつうじて朝鮮文化の理解者であり紹介者となった浅川の原点には、この博物館での学びがあった。1912年上野公園で開かれた拓殖博覧会の朝鮮館では、李王家博物館から借りた品々が上野公園で展覧された。ここを訪れたバーナード・リーチと富本憲吉が、興奮しながら朝鮮焼の美しさについて談義をおこなっている。朝鮮の土を手に入れたいとリーチが言い出し、展示品を互いに手にとってみたいと言い合った、とくに墨で唐草文様の徳利が気に入った…など、触れ合いに喜んだ報告がある⁹⁾。これがリーチの朝鮮行きの引き金になった。このように博物館を媒介として、朝鮮の文化に直接触れ学ぶ機会がつかられ、民藝運動をはじめ東アジアの文化交流に広い反響をあたえることとなったのである。

(2) 総督府博物館

朝鮮半島の博物館史をふりかえるなら、もう一つの重要な系譜に触れないわけにはいかない。東京帝国大学工科大学助教授であった関野貞は建築物調査のために1902年にはじめて韓国に渡り、慶州、大邱、開城、京城などを踏査した。これは新羅・高麗・李氏朝鮮の各時代の建造物と遺跡調査にかんする最初の系統的な学術記録である¹⁰⁾。そのなかで、多くの遺跡の盗掘や遺物の散逸を惜しんだ関野は、古蹟保存会なるサークルをつくり、その後の考古学研究者とその協力者たちに受け継いだ。さらに遺跡と遺物を守る博物館の必要を総督府当局に訴え、この要望は藤田良策などその後続く古蹟調査にかかわる人々に受け継がれていく。藤田良策は、高麗の陶磁器や金銀品の多くが異邦人の手に売られ散逸することが多いなかで、せめて李王家博物館があることによって半島の宝

8) 浅川、前掲書、266頁。

9) 富本健吉(筆名:安堵久佐)「拓殖博覧会の一日」『美術新報』第219号、八木書店、1912年。

10) 有光教一『朝鮮考古学七十五年』昭和堂、2007年、171頁。



総督府博物館（始政五年記念朝鮮物産共進会美術館）
（佐賀県立名護屋城博物館所蔵）

を一部でも救うことができたことに、胸をなでおろしている¹¹⁾が、発掘の遺物を保管する場所はそれでもとても足りない。こうして古蹟調査の成果を収集保存する新たな博物館として景福宮の北側に総督府博物館が開館するのは1915年、その翌年には「古蹟および遺物保存規則」の発布があり、古蹟にたいする取締や保存調査の法制上の整備が整えられた。これは日本（内地）よりも早い、近代的文化財法の発布であった。

欧州で発掘や資料保存の教育を受け、史料編纂官兼帝国大学助教授であった黒板勝美は、1915年の古蹟および遺物保存規則の策定に大きく関与している。この法律策定の背景には、これが成立する以前の発掘調査のなかで、古墳の盗掘や市場に出回る事件がみられ、それに携わった研究者たちがみな心を痛めていたことがあった。この保存規則の施行により、朝鮮半島の発掘調査によって

11) 伊藤純、「李王家博物館から柳宗悦の民藝運動へー李王家博物館に学んだ人々」『柳宗悦展 暮らしへのまなざし』NHK プロモーション、2011年、171頁。

発掘発見された文化財は、海外はもちろん日本内地にさえも持ち出しが一切禁止され、総督府博物館で整理・登録されることが義務化されたのである¹²⁾。植民地の歴史的遺物について、宗主国への持ち出しをも禁止する法律は、欧州の帝国主義にはみられず、日韓併合後の朝鮮における博物館の固有性をつくりだすことになった。政治支配が到達するところ古蹟調査が始まり、それが統治に直結していることを否定まではしないにせよ、古蹟調査がすべて統治のためだけに行われたと考えるのもバランスを欠くのではないだろうか。古蹟調査が朝鮮半島への理解や親しみを深め、その崩壊や散逸を防ぐべく活動した人間があり、それらの収集拠点をそれらが発見された朝鮮半島のなかに求めたことは、1908年の李王家博物館と1915年の総督府博物館の設置への力となった。この古蹟調査の遺物は、1915年の始政五年朝鮮物産共進会のために建てられた美術館に初めて一部展示され、その後、建物ごと総督府博物館となった。開館後では、日本人篤志家などから寄付を受けた遺物や美術品もここに寄付や寄宅などされ、ここに文化財の集積がおこなわれていくのである。総督府博物館は日本の敗戦による博物館接収まで、朝鮮半島の遺物と古美術の調査研究、収集、および保存のための拠点として機能した。

1920年代後半になると財政緊縮によって、1930年代になると戦況の悪化にともない、総督府の古蹟調査事業は破壊された遺跡の保護すらままならなくなり、資料保存のための経費すら厳しい状況になっていく。この厳しい状況への対処として黒板勝美は、「朝鮮古蹟研究会」という民間の有志から寄付を募る団体をつくってまでして、総督府の調査事業を継続させた¹³⁾。やがて太平洋戦争がはじまると、所蔵品保存庫としての防空壕の建設を博物館は求めたが、総督府は認めず、それどころか総督府博物館の建物と保存庫も閉鎖を示唆されることになった。戦況悪化のなか、ついに学芸員と研究者たちは、総督府の許可を得ずし

12) 「古蹟及び遺物保存規則」の策定前後の経緯については、金泰蓮「朝鮮総督府博物館の設立と運営について」佛敎大学大学院紀要文学研究科扁第43号、2015年、81-83頁。

13) 有光、前掲書、160頁。

て博物館員としてやるべきことをやることにし、博物館の所蔵品を博物館分館の倉庫があった慶州と扶余に疎開させる行動にでる¹⁴⁾。敗戦後、こうして守られた所蔵品は、アメリカ軍の管理下に入る。しかしこれで安心ということではなく、博物館資料がアメリカ兵によって抜き取られ、アメリカ兵向けの市場に出回っているところを、あわてて買い戻して散逸を防いだ、などということもあった。これらはみな、敗戦後も博物館に残った有光元館長はじめ数人の努力であった¹⁵⁾。現在ではそれらの収集物は、韓国国立博物館の所蔵となっている。

(3) 朝鮮民族美術館

かねてより日韓併合に反対し、同化や教化という言葉に抵抗し続けた柳宗悦が、朝鮮民族美術館の構想を発表したのは1920年、公的な費用は使わず私費と寄付で資金を募ったもので、開館は1924年であった。

柳が朝鮮民族美術館を構想した動機には、朝鮮美術に対する愛情の深さとともに、日本の朝鮮への政策に対する激しい憤怒の情が何よりも強かった¹⁶⁾。20歳のころから朝鮮の白磁に親しみ、はじめての朝鮮訪問で海印寺や佛國寺を訪れ、大藏経や石窟庵に世界的な遺産を認識した柳は、そのような民族を武力で抑える日本の政策を激しく憤った。日本の知識人たちが沈黙するなか、その憤りを著すのに常に的確であった。

14) 「総督府組織内にあった我々であるが、総督府を信用できなくなって、巡視員と用務員を含めても二十名に足りないわれわれ博物館員だけで陳列品を戦火から護ろうと決意し実行した」有光、同上書、36頁。この疎開作業の困難については36-41頁。

15) 有光、同上書、86-89頁。

16) 柳宗悦は青年のころから朝鮮美術に関心を持ってはいたものの、朝鮮に関する執筆が逆るのは、三・一独立運動の直後からである。直後の最も衝撃を社会に与えた論文として、たとえば「朝鮮人を想ふ」（『読売新聞』と『東亜日報』にて掲載）「朝鮮の友に贈る書」（『改造』と『東亜日報』に掲載）がある。中江桂子「1919-1924における柳宗悦の言論活動とメディアの役割」、韓国言論学会・日本マスコミュニケーション学会『第25回日韓国際シンポジウム抄録集』漢陽大学、2019年、311-325頁。

朝鮮固有の美や心の自由は、他のものによって犯されてはならぬ。否、永遠に犯されうるものでないのは自明である。眞の一致は同化から來るのではない。…私には教化とか同化とかいふ考へが如何に醜く如何に愚かな態度に見えるであらう。私はかかる言葉を日鮮の字引から削り去りたい。¹⁷⁾



柳と朝鮮民族美術館（日本民芸館所蔵）

柳は朝鮮独自の文化を朝鮮民族に忘れさせようとする日本の支配に抵抗して、朝鮮の文化を朝鮮の人びとが決して忘れることのないよう、美術館を建てることを考えた。言論の抵抗とともに、非暴力の方法で実践の抵抗をおこなったのであった。このため、それまでの常識のなかの美術史がとらえるような収藏品とは異なる作品が集められていたことも、意識しておく必要があるだろう。かれにとっての美術館設立は、観賞のためでも研究のためでもなかったからである。すなわち、「民藝」である。民藝運動は、藝術運動であると同時に、社会運動としても大きな意味をもっていた。民藝のモノを愛することは、そのモノを生んだ人々の心を愛し敬うことであり、ヘゲモニーによって虐げられようとしている文化を守ることでもある。朝鮮民族美術館は、そのような意味で、日韓併合と同化政策に対する、柳の抵抗活動そのものであった。

その藝術が偉大であるとは、直ちにその民族が美への驚くべき直観の所有

17) 柳宗悦「朝鮮の友に贈る書」『柳宗悦全集 6 卷』49-50頁。



朝鮮民族美術館館内

（日本民芸館所蔵）

者であるといふ意味である。…それは實に繊細な感覺の作品である。私は朝鮮民族の、美に對する敏銳な神經に對しては、實に疑ひ得るいささかの餘地をも持たぬ。私はその藝術を通して厚い敬念を朝鮮に捧げる心を禁じ得ない。それは如何なる人たるを問はず正に抱かねばならぬ驚嘆である。この名誉こそは永く厚く尊重されねばならぬ¹⁸⁾

したがってこの美術館には、李王家博物館にも総督府博物館にはほとんど収蔵の無い生活文化史的遺物、たとえば李朝の陶磁器や木工品類、日常生活に付随する道具類等がすべてと言ってよいほど、あふれていた。現代の言葉でいえば、民俗資料の博物館といってよいだろう。朝鮮のんびりと自ら朝鮮の生活文化の美しさや偉大さに気づき、民族の心への誇りを忘れず自由を取り戻すこと、それこそこの美術館の目的であった。「私は古への朝鮮が驚くべき藝術を私に示

18) 柳、同上書、47頁。

す事によって、現代の朝鮮にも深い希望を持つ事を学ばしめたのを感謝してゐる」¹⁹⁾。

つねに抑圧された側にたち、ヘゲモニーに挑戦した柳宗悦の抵抗は、自らの生命や家族の危険も賭して貫かれたが、この美術館さえ、日帝時代におこなわれた広い意味での文化統治のひとつとして考えられ、韓国人からすら批判の対象となることがある。というより、そのような批判は今やステレオタイプのように繰り返されている感がある。しかし、韓は柳の思想と行動を文化統治の一環とすることこそ、支配者の側の論理に「変質」させられたものであり、このような見方は許されない、「否定されなければならない」と述べている²⁰⁾。

(4) まとめ

博物館を文化政治の拠点として批判の対象とすることは、研究史のなかでは馴染みがあるものだ²¹⁾。歴史的な文脈からいっても、文化政治としての博物館のありようは事実として記述されなければならないことも理解している。しかし、すべてがその論調で塗り潰されてしまうことは、博物館とその周りで起きている現象の多層的な視点を、初めから否定してしまうことにならないだろうか。

朝鮮における事例において、総督府博物館が総督府の裏すなわち景福宮の跡地に建設されたこと、朝鮮民族美術館がかつての景福宮内の緝敬堂におかれたこと、李王家博物館が開かれたことなども、王宮という象徴空間に日本が博物館を置くものであり文化支配を象徴するものである、という言説を否定はしない。しかし象徴空間がどのようなものかは、結局のところ、象徴を読み込む人間の立場によって意味が変わるし、そこで何が行われたかという具体的事実によって、象徴の意味はひとつではない。その内容の詳細について十分な検討が

19) 柳、同上書、48頁。

20) 韓永大『柳宗悦と朝鮮—自由と芸術への献身』明石書店、2008年、242頁。

21) 李成市「朝鮮王朝の象徴空間と博物館」『植民地近代の視座 朝鮮と日本』岩波書店、2004年、ほか。

なされないままに、一面的に非難されてしまう傾向があるのではないかという危惧を禁じ得ない。

李王家博物館、総督府博物館、そして朝鮮民族美術館、そのすべてがそれぞれ、朝鮮の歴史に記憶されるべき宝物や歴史的考古学的遺物、および朝鮮民俗の保存のために設立されて実際に利用されたのであり、必ずしも日本帝国の歴史的伝統や文化的優位を示す為だけにあったのでなかった。少なくとも現場の博物館の学芸員や研究者たちは、朝鮮という場で科学的調査を地道におこない、日本への流出にすら警戒していたのであり、決して彼らは帝国の政治家ではなかった。戦争激しい時代にあっては、総督府の政策とは関係なく文化財を守った研究者がおり、その拠点が博物館であったことも、事実であった。帝国主義下の文化政治の尖峰としての博物館、という言葉ではこぼれおちる事実が、朝鮮半島にはたくさんある。少なくとも、近代的科学調査の場所としての博物館と、帝国のための博物館、という捉え方の間にある不協和を、ここにみてとることができよう。エキシビションの多層性をとらえる上では、このような不協和こそ歴史的事実を理解するために重要なことなのである。

3 朝鮮と博覧会——博覧会の多様性とその意味

19世紀末から20世紀初頭にかけて、消費社会の社会的基盤が形成されるこの時期は博覧会の時代ともいわれる。本稿のとりあげる1910-1930という時期には、前述した近代的ミュージアムの成立のほかに見逃すことのできないエキシビションとして、博覧会がある。日本では、日本内地においても植民地でも多くの博覧会が開催された。小さな博覧会をも合わせると、2-3年も間を置かずに開かれているといってもよい。ここでは、そのなかでも植民地朝鮮における博覧会および内地の博覧会の朝鮮館について論じることとする。この時期に開催された主な博覧会であり、本稿がとりあげるのは、拓殖博覧会（上野公園 1912年）／東京大正博覧会（上野公園 1914年）／※始政五年記念朝鮮物産共進会（京

城 1915年)／平和記念東京博覧会 (1922年)／※朝鮮博覧会 1929年、(※は朝鮮における博覧会)、およびその周辺の時代状況である。

(1) 拓殖博覧会・東京大正博覧会 (上野)

明治天皇の崩御に際し、明治に達成した大日本帝国の偉業を確認するために最も効果的なのは、明治における帝国の領土拡張を示すことであった。1912(大正元)年に上野公園で開催された拓殖博覧会は、植民地及び開拓地だけを取り上げた博覧会である。拓殖博覧会の趣意書には、樺太・台湾・朝鮮と、領土を広げた帝国の栄光を賛美しながらも、この領土を得てもそれをうまく経営していくことが今後の重要な国民的課題であることが述べられている。それに続いて、

邦人の殖民思想は兎角幼稚にして、臺灣といえは廠煙蚕雨の酷熱地を想像して、産業界の面目如何に改まれるかを知らず、又樺太といえは雪山氷河の極寒の地を想像して、拾われざる遺利の如何に大なるかを知らず、朝鮮関東州に対する亦期の如くにして、……膨張する国運に対応する所以にあらず。吾吾同志之を遺憾とし臺灣朝鮮北海道樺太の製産品を内地に紹介し……²²⁾

すなわち、内地に住む日本人の植民地についての理解があまりにも幼稚だと言っているのだ。日本人のその幼稚な考え、(すなわち樺太から台湾までの)新しい国土にたいする一般の人々の差別的先入観を破壊し、その土地に興味を持ち理解してもらうために、この博覧会は開かれている。もちろん先入観を壊すためには、製産品だけではなく、そこにある文化習俗にも親しむ必要がある。

朝鮮館には、入り口に南大門の模型があり、それをくぐると朝鮮全土、慶福宮、慶州佛光示石窟の多宝塔の模型があり、その脇には朝鮮虎のはく製も置か

22) 拓殖博覧会編『拓殖博覧会事務報告』拓殖博覧会残務取扱所、大正2年、4頁。

れ、衆目を集める展示となっている。これらは朝鮮の観光名所の紹介とでもいうべきだろうか。また李王家の宝物も李王家博物館から出品されており、なかでも王朝初期の甲冑の美しさは来場者に相当なインパクトがあったという。もちろん博覧会の直接的目的、すなわち朝鮮の農工業の現状紹介と農工業品の展示、内地からの移住者の状況などを説明展示もあり、接触と交渉を促すスペースもあった²³⁾。また、朝鮮館とは別に、観光館と称される建物があるが、ここは各地の風景や人々の生活情景を見ることができる映画館となっており、東大門・南大門と総督府などの京城市街、水原、漢江、平壤の市街、鴨緑江や釜山の停車場などを、映画で見ることができた。また朝鮮優待室という、朝鮮建築の建物で人参湯を飲ませる施設などもあった。

この拓殖博覧会では、現地の人びとの生活風俗や人々そのものも展覧の対象になっており、「今後如何に彼等を訓導すべきかを研究する機会を内地人に与える」ための展示であるとその趣旨を説明していること²⁴⁾から、拓殖博覧会イコール植民地差別の象徴として既研究では論じられることがほとんどである。そこにあらわれた差別意識を否定はしないが、しかし差別意識だけでこの博覧会を塗りつぶしたのでは、そこに理解や交流などは起こりようがないのではないだろうか。拓殖博覧会を訪れた人々は、朝鮮人差別を植えつけられた可能性を否定できないにせよ、同時に、日本では得られない朝鮮の魅力を掻き立てられたといっても、間違いないだろう。

拓殖博覧会の2年後に同じ上野公園で、東京大正博覧会が開催された。この博覧会は「大正天皇即位を東京府民が奉祝し、誠意をもって日本国民と祝意を分かち合うために、産業と文化の進歩を計るため」²⁵⁾と趣旨が説明されている。つまり日本人一般向けの博覧会であり、工業館、教育及び学芸館、衛生経済館、林業館、鉱山館、拓殖館、などとパビリオンが並ぶ。上野公園と不忍池を結ぶ

23) 拓殖博覧会編、同上書、73頁。

24) 拓殖博覧会編、同上書、63頁。

25) 内田寅次郎編『大正博覧会案内』万文堂、大正3年、1頁。



東京大正博覧会 朝鮮館

(佐賀県立名護屋城博物館所蔵)

ロープウェイやエスカレーター、エレベーターなどが、会場内に建設され、それもまた日本の産業技術のわかり易い体験として大人気だった。さて、朝鮮と台湾は、拓殖館とは別に朝鮮館と台湾館を出している。この2館は建物の赤と青の色が目立ち、子供にたいへん人気だったという²⁶⁾。朝鮮館は、建物そのものが昌徳宮の一部を模したものとなっており、そこに玉座の展示もあり、衆目を集めた。朝鮮半島や京城市街の大模型の展示のほかに、李王家宝物としては古代の仏像や青磁器なども置かれた。風俗衣装を着た人形や、織物や煙草の展示もあり、また、朝鮮美人が物産を売る売店もあった²⁷⁾。ここでも示されている朝鮮とは、朝鮮半島の歴史と文化の理解に寄与する展示であり、あからさまな帝国色があるとすれば朝鮮総督府と京城の近代的街並みの模型くらいだろうか。

26) 内田寅次郎編、同上書、25頁。

27) 大正博覧会には、「美人島旅行館」があり、美人と称される女性にさまざまな演目をさせる場所があり、俗悪極まりなく批判が強かった。井上章一は大っぴらに性の商品化が行われていく社会変容の象徴的な事例としている。「朝鮮美人の売店」は評判が良かったようだが、ここに植民地と性との重なりを見ることもできよう。美人島旅行館については、荒俣宏『万博とストリップ』集英社新書、2000年、160-164頁。井上章一「コンパニオンが女看守とよばれたころ」佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版、2015年、385-405頁。

しかも、玉座や青磁器などはむしろまだ見ぬ朝鮮への憧憬を作り出すという一面もあったはずである。

朝鮮館の展示スペースは、拓殖博覧会では288坪あり朝鮮フィルムが見られる映画館もあったのに対し、大正博覧会では250坪にすぎず映画はなかった。しかし、東京大正博覧会は、当時これまでの博覧会で当時最大規模と謳っている²⁸⁾ように、拓殖博覧会来場者が9万人であったのに対して東京大正博覧会来場者は746万人に至る。大正博覧会開催期は、東京駅舎の完成の少し前だったものの、ほぼ全国的な鉄道網が完成した時期であった。東京大正博覧会はいわば大衆の東京観光ルートの一部として楽しまれたのである。博覧会編集室が出していた『東京大正大博覧会観覧案内』も『大正博覧会案内』も、巻末には「東京一日観光」「東京名所案内」といったページが綴じられている²⁹⁾。それらの体験もひとまとめとして、多くの日本人に与える影響は大きかったと考えてよいだろう。そこはやはり、博覧会なのだ。

(2) 朝鮮における博覧会のはじまり

朝鮮における初めての博覧会は、1906年に釜山で開催された日韓博覧会である。朝鮮統監府が設置され、わずか4か月後であった。統監府の役員と旧韓国政府の大臣らによって日韓貿易の発達に資するため、として開催されている³⁰⁾。とはいえ必ずしも官主導というわけではなく、博覧会の成功には、釜山の商工会議所から大きな協力があつた。釜山はいうまでもなく、日本と朝鮮半島の連絡の要であり、古くからの日本との物と人との交流の長い歴史がある。ここには当時すでに四半世紀近い歴史を持つ商工会議所が、日本と朝鮮の双方にあり、

28) 東京府編『東京大正博覧会事務報告上巻』、東京府、大正5年、84頁。

29) 東京大正博覧会案内編集局『東京大正大博覧会観覧案内』文洋社、大正3年、所収の「東京一日めぐり」は、100-117頁。内田寅次郎編、同上書、所収の「東京名所案内」は巻末の20頁ほどにある。

30) 朴美貞「植民地朝鮮の博覧会事業と京城の空間形成」『立命館言語文化研究』第21巻4号、2010年、149-150頁。

彼らは協力して釜山経済のために活躍してきたという社会的基盤があった。日韓博覧会には、日本からの工業製品と朝鮮各地の特産品や伝統工芸品などが集められた。そして在朝日本人の扱う品目を朝鮮の人びとにより広く知らしめ、かつ朝鮮から日本への販売ルートを創出する価値のある品物を見いだすことに大きく寄与した³¹⁾。その後、日本人居留地を中心に博覧会が各地で開催されるようになるが、地元の商工会議所が共同して協賛会をつくり博覧会を運営する方式が、雛形として最初にここに作られたといつてよい。

日韓博覧会の次の年1907年には京城博覧会が開かれる。京城は1900年前後から近代化の端緒にあり、たとえば、1900年には日本人街に初めて電灯が付き、朝鮮銀行や京城商工会議所などの洋風の近代建築が京城の風景を変えていた。1904年には釜山と京城をつなぐ鉄道が開通し、1907年には光化門から南大門にいたる広い道路が完成し、繁華街が拡張していく。そしてその年に開かれた博覧会は、統監府が発起し、韓国政府の大臣も旗振り役をするものの、日本朝鮮双方の商工会議所、日本居留民団長、主だった企業銀行から博覧会の運営メンバーが構成されて運営をしていた³²⁾。

いくら大日本帝国のイデオログが日鮮同祖とか内鮮一体などと言っても、居留日本人と朝鮮の人びととの間は、現実の生活のなかでは「同化」と「訓示」だけではとても生きられない。しかし繰り返されるイデオログを前にして、居留日本人社会は総監府・総督府に対して常にズレを感じていたのであり、それどころか葛藤や反目の感情すら積み重ねられていた³³⁾。朝鮮に生きる日本人は決して一枚岩ではなかったのである。かといって、経済的には日本人のほうが裕福であり、朝鮮社会に同化できたわけでもなく、分断・差別と実生活上の協

31) 朴美貞、同上論文、151頁。

32) 朴美貞、同上論文、156頁。

33) 李東勲『在朝日本人社会の形成 植民地空間の変容と意識構造』明石書店、2019年、120-168頁。在朝日本人社会の多様性と、居留民であるために複雑な法制度のもとに置かれたこと、さらにそれが重なり生じた総督府との緊張関係について論じられている。

力との間で、生きにくい社会生活であっただろうことは容易に想像がつく。そのなかで地域の博覧会は、軋みや葛藤の多い日本と朝鮮の双方の経済人にとって、互いの繁栄を模索する機会と場所を協力してつくりあげるといふ、少ない機会となった。いわばわずかな潤滑油とでもいえるだろうか。こうして民間の博覧会は、京城、釜山、平壤、木浦、鎮南浦など、商業都市を中心に各地で開かれていくことになる³⁴⁾。

(3) 始政五年記念朝鮮物産共進会（京城）

1915年に京城で開かれた始政五年記念朝鮮物産共進会は、それまでの地域の商工会議所主導の博覧会とは異なり、朝鮮総督府が積極的に主導した行事であった。これは総督府5周年を記念し、総督府によるこの間の朝鮮の発展を記念するための博覧会として計画されたため、前述の釜山の日韓博覧会や京城博覧会とは性質を異なるものだった。このイベントの複雑な意味を整理していこう。



始政五年記念朝鮮物産共進会入口 光化門（佐賀県立名護屋城博物館所蔵）

34) 朴美貞、前掲論文、153頁。

「博覧会」ではなく「共進会」という名称になっているのは、寺内正毅朝鮮総督の意志が強かったという。新進のモノと人を集め見世物や娯楽会場にも似た内地の博覧会を構想しているのではないという意思表示だった³⁵⁾。朝鮮全土の品々の質を審査し追及して将来の礎にすることを示すために、わざわざ博覧会という言葉避け、共進会と名乗ったのだ。「この共進会で朝鮮という存在を日本内地に売り込もうとする総督府の意気込みは熱烈であり、朝鮮半島の一三各地から農産工芸品など多くの物産が集められ、展示室を飾ることになった」³⁶⁾。そして品評会方式でその質を評価する場として構想されたのであった。ただし、共進会が開催されてみると、日本の芸妓と朝鮮の妓生が入れ替わり演じる演芸館や、ケーブルカーに乗って観覧ができる鉄道館別館や、夜間の花火やイルミネーションなどが注目され、娯楽要素もかなりあったといえる。「朝鮮の物産品に限定した当初の共進会の構想に『内地』で定着していた博覧会の要素を接ぎ木した形」³⁷⁾となっていた。実質的な博覧会であった。

この共進会の会場は、李朝の大院君が再建した景福宮であった。これは、かつての王宮としての象徴空間を、総督府が自らの権力行使の場として転用したものだ。共進会の開会宣言は景福宮の勤政殿の高座で寺内総督がおこなった。景福宮の使われない建物とその周りの庭園の空間は、共進会会場と旧跡を巡るに都合がよいとか、交通の便が良いとか、様々な理由があったにせよ、権力の移行を知らしめるために象徴的な場所だったといえよう。その後、博覧会がここで開かれたことに対する批判は、数知れない。

共進会会場には美術館もつくられる。ほとんどの博覧会建物は期間終了後に壊されるが、共進会の美術館は壊さない方針で唯一の耐火構造の建物として建

35) 李東勲、前掲書、209頁。

36) 李泰文「1915年朝鮮物産共進会の構成と内容」『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』30号、2003年。山路、前掲書、115頁。

37) 李東勲、前掲書、210頁。



始政五年記念朝鮮物産共進会 光化門前の群衆

（佐賀県立名護屋城博物館所蔵）

設された³⁸⁾。煉瓦造りのルネサンス式で、正面はコリント式石柱のある西洋建築であり、共進会のなかでもひととき目を引く建物であったことはいうまでもない。前述のようにこの美術館には、古蹟調査で発見され集められた多くの遺物や貴重な出土品からの出展、個人所有の朝鮮の古美術品の出展、および日本朝鮮の現代美術家作品の出展、があった³⁹⁾。朝鮮の歴史と現在の美術品がここで人びとにはじめて展示されたのである。朝鮮の人びとにとっても日本人にとっても、朝鮮文化を理解する重要な資料であった。そののち、建物および展示物は、そのまま総督府博物館の所蔵となった。

38) 金泰蓮、前掲論文、79頁。

39) 全東園、前掲論文、220-225頁。展示品全体からみると、収集された古蹟資料の展示点数はごく少なかった。博覧会展示に適するものが乏しかったのかもしれない。それらに加えて、朝鮮在住の一般から秘蔵美術品を募集して展示した。古美術品などが931点が集まり、そのうち691点は日本人が所蔵していた古美術品であった。そののちこれらは、個人に返却されず、総督府博物館の所蔵となった。その他、内地朝鮮双方の現在の美術家たちの作品も展示された。

この共進会を訪れた入場者は最終的に116万を超え、朝鮮人はその70%ほどの82万人だった⁴⁰⁾。朝鮮の人びとは、新しい鉄道や乗り合い自動車にのり、はじめて京城を訪れた人も多かったであろう。少なくとも、82万の朝鮮の人びとが同じ場所を訪れ同じものを見ることなど、歴史上無かったはずである。そして彼らは、光化門をくぐるだけで、また景福宮を歩くだけで、時代の変化を身にしみ感じていたのだ。彼らにとって、13道すべての珍しい物産を一堂に集められ、しかもあふれるほどに陳列されている光景を目にすることは、「内地」ではなくむしろ「朝鮮」という自らの生きる地域を意識させたにちがいない。もちろん権力主体の変化は思い知らされたのであろうが、朝鮮の人びとに日本という内地への同化を促進するというより、近代への認識を促し、朝鮮の歴史とその変動を自覚する方向で経験がなされたと言ったほうが適切だろう。朝鮮の人びとにとってこれこそ近代の博覧会経験といってよい。彼らのほとんどは共進会をたいへん真面目に厳粛に観覧していた、という。「博覧会を娯楽として楽しむ日本人に比すれば、朝鮮人の態度はあまりにも『厳粛』であり」⁴¹⁾、日本人から嘲笑されるほどだったという。朝鮮の人びとにとっての共進会の経験は、娯楽経験として楽しんだ日本人とは異質なまなざしであったことは事実であり、激変する社会的背景に鑑みると、厳粛になる気持ちもよく理解できる。

さて、総督府と居留日本人社会と間が必ずしも親和的ではなかったことは、前述した。とはいえ、共進会を支える過程で、日本人社会の一部が総督府政治と次第に融和していくことも報告されている。共進会を訪れた日本人は、朝鮮の物産品の展示より、5年間の変貌を視覚化した審勢館に引き付けられていた。日本人は自らの朝鮮での功績を確認し、自分たちが歴史を作った場所として支配の正当性を肯定したいという欲望を、ここで満たすことができたのである。そして表面的にでも総督府に協力することが、経済の活性化や景気改善という

40) 李東勲、前掲書、212-213頁。

41) 李東勲、同上書、218頁。

実利をもたらすことを理解し、やがて総督府に妥協していく日本人社会があったことが、李の研究に紹介されている⁴²⁾。共進会によって、日本人の方が朝鮮社会の現実に包摂されていくという変化も、見逃すべきではないだろう。

(4) 平和記念東京博覧会（上野）

1922年の平和記念東京博覧会は、世界大戦終結を祝うとともに、これから予想される経済戦争への準備を整えるためとして上野公園と不忍池で開催された⁴³⁾。とはいえ、平和記念博覧会は、それまでの博覧会と比べても意匠や広告に重点が置かれたきわめて娯楽性の強い博覧会であった。もちろん、制作工業館、化学工業館、染織館、建築館、教育館、拓殖館、外国館などは本来の目的でもあり、大きな施設が並んでいるが、その中心に置かれた平和館や演芸館は、各地の楽団（各地の軍楽隊・三越や帝国劇場の管楽隊など）による音楽会や歌舞伎狂言の興行、各地の芸妓連の舞踊や謡の演目がならんだ⁴⁴⁾。また、平和館では、音楽会・講演会・映画上映会なども行われていた。文化村と名付けられた娯楽施設のエリアも盛況で、活動写真を見せる催しや、仮装行列大会、少年少女の琵琶大会、自転車の曲芸乗りを見せる催しもあり、子供たちに大盛況で遊園地のような。新しいデザインの文化住宅の展示もあり、家族団楽を可能にする建築を見学することができた⁴⁵⁾。さらに、売店街も用意され、不忍池の西側はほぼ珍しいお土産や特産をまとめて買い物ができる散歩道となっていた。いつもどこかで〇〇デーと称する割引が実施され、それに対応するよう回数券や割引券等も発売され、人々を誘導していた。この敷地内に企業広告塔が22本乱立し、企業館の建物の上にある広告塔等もあわせると、大小で30本の広告塔が上

42) 李東勲、同上書、231頁。

43) 東京府編『平和記念東京博覧会事務報告 上巻』東京府、大正13年、3頁。

44) 東京府編『平和記念東京博覧会事務報告 下巻』東京府、大正13年、567-570頁。

45) 東京府編、同上書下巻、529-531頁。文化村の文化住宅については、内田青蔵「建築学会の活動からみた大正11年開催の平和記念東京博覧会文化村に関する一考察」『建築学会計画系論文集第529号、2000年、267-268頁。



平和記念東京博覧会朝鮮館

(東京都立中央図書館所蔵)

野公園にあった。夜間は電光で飾られた博覧会会場は、さらに目を見張らせるものだったろう。守衛や看守の装いも博覧会デザインが決められ、「博覧会の歌」「平和記念東京博覧会歌」もつくられた⁴⁶⁾。もちろん、博覧会出品にたいて金杯・銀杯などの褒章が与えられるという博覧会本来のイベントはあったものの、多くの来場者にとってその意味は相対的に低下した。むしろこの博覧会は消費社会的ライフスタイルを学ぶ格好の場となっていた。

巨大娯楽イベントであったこの博覧会には1100万人以上が詰めかけ、大成功といってよいだろう。ただ、近代的な視点で陳列と評価のためのイベントというよりは、江戸時代の見世物性の復活でもあった。吉見はこれを、「博覧会が近代化の装置としての役割を放棄したことを意味するわけではなく、近代化そのものの構造的な変質を意味している」⁴⁷⁾と述べ、スペクタクル性のなかに商品と生活の未来を幻想していくという近代化について語っているが、この転換が

46) 東京府編、同上書下巻、515-516頁。「博覧会の歌」(中内蝶二作、本居長世作曲)・「平和記念東京博覧会歌」(小林愛雄作歌、山田源一郎作曲)。

47) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書、152頁。

まさに起こった博覧会であったといえよう。さて、そういうなかで平和記念東京博覧会における朝鮮館は、伝統的な建築様式のまま、どっしりと不忍池の淵にあった。「朝鮮総督府が多大な費用を投じ全部建築士たる特別館であるから、建物の雄大なことにおいて池畔を圧している。本館は京城の慶会楼などをモデルにした大建物で、棟の上には守護神なる鬼龍子の変な怪物を従えて俯瞰しているのには、先ず観る者の目を惹く」⁴⁸⁾ という記載があり、この博覧会に込めた総督府の意気込みはわかる。朝鮮の特産物の紹介や、美術品の展覧、オンドル家屋を再現したもの、金剛山の模型などが配置されている。また接待室では、お茶をのみながら官妓の舞踊が見られる。また朝鮮料理の食堂も経営していた。基本的には伝統的な朝鮮像の展示であるが、飲食や舞踊などの娯楽を用意しているところなど喜ばれた。

エンタテイメント性を強めた平和記念博覧会のありかたは、一大メディアイベントであったともいえようが、そののちこれは、京城にて計画される朝鮮博覧会に影響を与えている。

(5) 朝鮮博覧会

共進会から14年後、昭和天皇の即位の翌年、1929年に朝鮮博覧会が京城で開催された。場所も共進会の時と同じ景福宮であり、その趣旨も併合20年を記念し、その間の植民地朝鮮の発展を確認するとともに、各地の農工業産品と特産品を取り揃えて、産業と流通のさらなる拡大を目指すものであった⁴⁹⁾。すなわち、朝鮮博覧会の趣旨は、始政5年記念朝鮮物産共進会とまったく同じである。

とはいえ、朝鮮博覧会の開催に至るまでに京城は都市の構造を刷新していた。博覧会と都市改造は並行しておこなわれ、王宮跡地に建てられた朝鮮総督府を中心に、南北東西に広い街路を整備し、その主要な街路を中心に近代的な施設

48) 大木栄助編『平和記念東京博覧会写真帖』郁文社、大正11年。

49) 斎藤実「朝鮮博覧会に際して」『朝鮮』173号、1929年、1-2頁。



朝鮮における博覧会の会場で、いつも悠然と建ち、朝鮮の歴史をほうふつとさせてきた慶会楼
(佐賀県立名護屋城博物館所蔵)

群が建てられた⁵⁰⁾。すなわち京城の中心地域の拡張であるとともに、総督府の権力装置を視覚化して近代化を進める地理的な環境が整ったのだった。とはいえ三・一独立運動の影響もあり、日本人と朝鮮の人びとの対立を穏やかにしなければならず、そのためには日本人街と朝鮮人街の地図上の分離を都市全体の開発によって徐々に融合していくことが求められた⁵¹⁾。その都市改造の総仕上げとしての博覧会である。このため共進会とは異なり、かなり広い博覧会会場が用意されることになった。さらに、この博覧会会場造営のすべては、材料も作業もすべて地元の業者が請け負うこととなったという⁵²⁾。朝鮮の人びとの生活と経

50) 大通りに面した近代建築群として代表的なものは、朝鮮総督府、朝鮮殖産銀行、東洋拓殖株式会社、漢城銀行、朝鮮銀行、朝鮮ホテル、京城日報社、京城駅、京城府庁、南大門ビルディング、京城電機会社、中央ホテル、京城府立図書館、京城銀行集会所など。当時の朝鮮経済の中核にある組織体の建物がほとんどである。いずれも権威的な洋風建築であり、人々のまなざしを古い宮廷建築からはがし取った。

51) 朴美貞、前掲論文、158-159頁。

52) 山路、前掲書、126頁。

済の向上のため、および社会的対立の穏和化という社会政治的要請のもとで開催された博覧会だった。

博覧会の建物は、産業館、社会経済館、審勢館、参考館、各13の道それぞれの個性的な展示館があった。総督府の業績を示す（共進会にもあった）基本的な展示館のほかには、朝鮮総督府が内地向けの輸出農作物として力を入れていた米に関して、米の館という展示館ができて注目を集めた。朝鮮各地から収穫の米が展示され、豊年踊りを踊る電気仕掛けの人形もあり、来場者を楽しませたのである。内地の大都市地域はそれぞれ東京館、大阪館、京都館、名古屋館などをもち、独立館をもたない県は内地館のなかに各県にブースが用意され、特産品などの展示をした。また、朝鮮博覧会では陸軍館、海軍館も建てられ最新鋭の武器などを展示していた。朝鮮博覧会では今の内地の各地の展示が手厚くなされ、朝鮮の人びとはここで内地全土を見渡すことができたといっよい。なかには、台湾の仮面神の踊りあり、博多のドンタクも踊り歩き、演芸場では音楽会や伝統的な歌舞のほか、日本の芸妓の日本舞踊も楽しむことができた。日本の人気漫画の主人公「正ちゃん」を正門に掲げたこどもの国では、子供用の汽車が人気を呼び、新しい住宅の例として文化住宅も建てられた。企業は高い広告塔を立てて乱立状態となり、夜は電光での飾りつけで輝いた。「朝鮮博覧会の歌」もつくられた。

さらに朝鮮博覧会は広告にも力が入っていた。朝鮮13道のいくつかは、それぞれの地域内の産業を紹介する手軽なパンフレットを用意していた⁵³⁾し、朝鮮博覧会京城協賛会は新聞紙上での博覧会の宣伝をはじめ絵葉書やポスターなど多くの印刷物を用意し、配布・販売をしている。さらに、整備された鉄道の宣伝と博覧会広告が一緒のものとして旅行案内につかわれ、新聞やパンフレットなどが観光客誘致に利用された⁵⁴⁾。鉄道局や旅行社も、博覧会をきっかけにし

53) 朝鮮博覧会で配られた慶南のパンフレットは、慶尙南道協賛会『慶南の産業一斑』慶尙南道協賛会、1929年。B6版30頁ほどの冊子であった。

54) 山路、同上書、134-135頁。



米の館

『朝鮮博覧会寫真帖』より

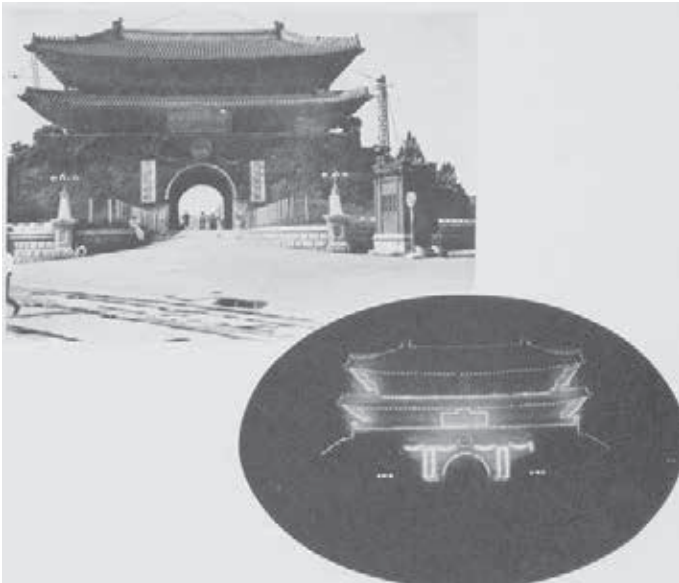


米の館の内部 左の楕円形の入れ物は朝鮮各地産の米が展示されている
台上には豊年踊りのアトラクション 『朝鮮博覧会寫真帖』より



こどもの国の正門

『朝鮮博覧会寫真帖』より



南大門（昼と夜のライトアップ）

『朝鮮博覧会寫真帖』より

て、観光旅行という人の流れを朝鮮内ばかりでなく内地からもつくりだそうと動いた力は、共進会よりもはるかに強かった。その総合的な成果であろうか、来場者数の総計は140万前後とみられる⁵⁵⁾。これは共進会の116万を上回り成功だったといつてよいのだろうか、規模も広告費も違うことを考えると、本来はもう少し来場者が大きくてもよかったのではないか。陸海軍が武器の展示をしていたことを除いては、朝鮮博覧会のありかたは平和記念博覧会と大変似ているので、もしかしたら日本人にとっては、既視感があったのだろうか。

ももとは「ビジョンのある都市計画は朝鮮博覧会のセールスポイントでもあったが、一方で…ディズニーランドのようにあらゆる様式、あらゆる形の建物多混在したのがこの博覧会の特徴でもあり、近代消費社会の始まりを告げるものでもあった」⁵⁶⁾。朝鮮博覧会は、スペクタクルと疑似体験の仕掛けが満載に用意され、テーマパーク的な喧噪が全体にまき散らされ、勤政殿と慶会楼という朝鮮の歴史的建造物の悠然とした存在をも、博覧会の創出するイメージの中に溶け合わせてしまった。そしてこの博覧会は、日本人と朝鮮の人びとに対して同時に近代の権力装置、すなわち娯楽を通じて日常生活の基盤を変容させていく権力を、朝鮮において起動させたのである。

(6) まとめ

1910-1930の期間を中心に日本と朝鮮の双方で開かれた主要な博覧会について論じてきた。博覧会が実際に開催されるその時代や社会的背景の違いによって、異なる意味をもたらすことは当然のことである。ただし植民地朝鮮における博覧会は、さまざまな複雑さがみとれる。まず、朝鮮においては異化される側である日本人が、朝鮮の権力者として朝鮮の人びとの方を異化し、教化しようとしたという屈折。さらに、一方では朝鮮の人びとに指導を与え教化・同化さ

55) 朝鮮博覧会協賛会、『朝鮮博覧会京城協賛会報告書』朝鮮博覧会協賛会、1930年、197頁。

56) ウィーベ・カウテルト「景福宮から朝鮮博覧会場への空間変貌」佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版、2015年、259頁。

せようとする政治圧力があるのだが、他方、博覧会においては、朝鮮の多様な風土の豊かさや朝鮮の歴史をまさに博覧会の目玉にして開催するという、逆説。このような矛盾を多様にはらんだ複雑なまなざしが、日本と朝鮮の博覧会のなかで乱反射することになる。民間の商工会議所が地域で博覧会を開催していた場所では、普段は軋みのある日本と朝鮮の人びとの軋みにたいして、この博覧会が双方に同じ目標と協力と利益をつくりだし、地域社会にとって良い方向に寄与していた。とはいえ、これは地域社会の中の分断と差別が解消されない現実を反映しているともいえるが、それでも博覧会のひとつの機能があったといえるだろう。

ところが、朝鮮総督府主導の大規模な博覧会では、ことは同じようには進まなかった。たしかに、権力の象徴に総督府がたったことにより支配の正当化の手続きがおこなれ、朝鮮の歴史に深い刻印を与えるものとなった。とはいえ、博覧会に登場したのは、西洋式の建造物と朝鮮王宮時代の伝統的建物であり、ただひとつ日本建築が欠如していた。さらに展示内容も、朝鮮の歴史と近代化をあらわすものが中心であった。このパラドックスは総督府主導の博覧会で繰り返されていく。内地との経済交流と流通の振興をめざす博覧会であれば、朝鮮各地の名所紹介や農工産品をあまねく展示することは不可欠であるが、これは日本人に経済活動を促す情報であったと同時に、朝鮮の人びとも「朝鮮」という地域的概念とアイデンティティを覚醒させたであろうことは、想像に難くない。日本における博覧会が、日本人に日本の多様性と魅力と可能性を伝えたように、朝鮮の博覧会では朝鮮の人びとも日本人にも、朝鮮という土地への覚醒と可能性を伝えることとなったのは、ある意味で当然であった。そしてここでは、朝鮮の人びとの日本文化への教化があったというより、近代文明への教化があった、と言ったほうが正しいだろう。もちろん差別のまなざしと憧憬のまなざしは、ときには反発し打ち消しあうこともあれば、ときには共存して支配欲を相乗的に高める方向に機能することもある。民族間の分断と差別は簡単に解消されるようなものではないが、それでも、博覧会の成功の過程のな

かでその関係にか細い橋がかけられたことは確かである。在留日本人社会もまた、朝鮮総督府とも朝鮮の人びとの社会生活とも、距離を作りながら生活してきたわけだが、それぞれの関係をチューニングするような機会が博覧会であった。そして、スペクタクル劇場化した朝鮮博覧会にいたっては、人々は故郷の地の違いに関わらず娯楽に興じる舞台がここに完成する。すなわち、ソフトパワーとしての近代化が進展することになった。

4 植民地朝鮮の観光地と旅

見る／見られるのなかに歴史的磁場と権力がかかわりをもつエキシビションとして、最後に、観光を挙げるべきだろう。観光地と鉄道は、植民地朝鮮の独特の条件のなかで相互的な発展を遂げる。そして実際の都市改造や地域開発をつうじて、朝鮮をエキシビションする方法が開拓され、土地が物語化され、人々の関心を創造する営みが続いていくことになる。この社会変化について、内地と朝鮮の相互作用も視野に入れながら論じていくことにしよう。

(1) 鉄道と観光の急激な開発

そもそも朝鮮における鉄道の敷設は、李氏朝鮮から鉄道敷設の権利を得て、1899年に日本が京城と仁川間に敷いたことから始まる。仁川は最も京城に近い国際港で対外的な受け入れ窓口になっており⁵⁷⁾、重要な交通の要所だったからである。そののち日本人の居留地であり日本との経済関係の深い釜山と京城との間に京釜戦が敷かれたのは1905年であった。日本の朝鮮統治は鉄道経営とともにあったといっても、外れてはいないだろう。日露戦争のための物資補給路線として京城駅と羅山駅との間に京義線が開通するが、京釜戦と京義線とがのち

57) 砂本文彦「日本統治下朝鮮半島における国際観光地・リゾート地開発に関する研究」『訪韓学術研究者論文集』第九巻、78頁。仁川の国際港は1920年代になると、アメリカからの豪華客船もたびたび入船するほど発展する。

に南満州鉄道と呼ばれるようになり、大陸間の動脈となった。帝国の目から見れば、この鉄道は、欧州鉄道—ポーランド鉄道—ロシア—シベリア鉄道—満鉄—朝鮮鉄道—日本という、「欧亜国際連絡運輸」の整備が一定の完成をみたのであり、国際旅行のルートとして期待するものであった。このため、朝鮮鉄道は初めから国際鉄道の標準規を採用しており、内地よりも高規格の鉄道として発展していくことになる⁵⁸⁾。そして日露戦争の陸軍の輸送ルートとして活用されたものの、日露戦争後に朝鮮総監府鉄道局の管理下に置かれると、その運営管理は厳しい現実に直面する。

日本の鉄道省にとって朝鮮鉄道は国際鉄道網の一部にすぎず、朝鮮鉄道そのものの経営にかんしては取り立てて関心を持つのではなく、日露戦争後はそれを陸軍や総監府に預けていた。軍用の活用が低調になると、朝鮮鉄道は厳しい業績不振に直面する。鉄道が走っていても、そもそも人が乗っていない、乗っていても、奉天などその先へ向かい朝鮮鉄道圏内で下車してくれない、などがあり、総監府鉄道局は最初から経営に苦心することになった。高橋の研究によると、1920年当時、内地の日本人が鉄道に乗る頻度は、1年で平均ひとりあたり7.26回であったのに対して、朝鮮の住人においては、0.72回にすぎなかった、という⁵⁹⁾。ほとんど営業利益が無く、総督府からの投資を常に必要としていた⁶⁰⁾。もともと朝鮮半島は海岸線が長く良港が多かったことや、産業がある地域が乏しかったこともあり、朝鮮の人びとの生活様式が鉄道に向かなかつたのだと考えられる。その状況のなかで朝鮮鉄道は、旅客開発と観光地開発に、社の命運をかけて取り組みはじめる。誤解を恐れずに言えば、朝鮮半島においては鉄道が観光地を創出するのであって、その逆ではなかつた。鉄道敷設と鉄道駅から観光地までの道路の敷設、乗合自動車運営、さらにホテル経営がセットで進められていたのは、必然であった。必要を創出し、開発を始めるのである。京城

58) 小牟田哲彦『大日本帝国の海外鉄道』東京堂出版、2015年、78-80頁。

59) 高橋泰隆『日本植民地鉄道史論』日本経済評論社、1995年、84頁。

60) 鮮交会『朝鮮交通史』1986年、697頁、735頁。

に建設された西洋式ホテルの朝鮮ホテルは、絵葉書にもなる京城の代表的なホテルであるが、これも1914年開業、始政5年記念朝鮮物産共進会の前年であった。ほかの鉄道ホテルも、それぞれ同様の理由で開業されている。

日韓併合の1910年には、朝鮮鉄道はただちに湖南線（京城―木浦）、京慶線（京城―慶州）、京元線（京城―白馬高地駅）を敷設する。木浦は釜山に次ぐ日本人居留地がある場所で、かつ太田―木浦間は朝鮮産の米の一大産地であるとともに水産物や工芸品が豊かであることから、内地との通商上の意味も大きい⁶¹⁾。他方、京元線と京慶線は観光開発と一体の鉄道敷設であった。慶州は言うまでもなく新羅の古都であり、集客が期待できた。京元線の終点元山は、日本海に向いた天然の良港であり交通の要所であったこともあるが、途中駅の鉄原駅は朝鮮を代表する観光地、金剛山観光のための駅であった。

このような観光開発の歴史があるため、朝鮮における観光ガイドは、ほぼ鉄道路線をたどる形式で編集がおこなわれている。例として、代表的な観光ガイド『朝鮮之観光』⁶²⁾を手引きに内容の概略を紹介しよう。

まず巻頭には口絵があり、慶州博物館にある新羅の黄金の王冠、風光明媚で知られる赴戦高原、金剛山、白頭山の名所の写真だが、それに続いて、鉄道の展望車・食堂・サンルームの写真が載せられている。鉄道に乗ることそのものが非日常の娯楽として紹介されているのである。そのあと、鉄道運賃や割引券、モデル観光ルートなど、鉄道利用の基礎情報、朝鮮鉄道直営ホテルの紹介、と続く。観光情報のはじめは朝鮮半島の鉄道網の拠点である京城から始まるが、ここには、日本人が京城を歩くのに困らないよう、観光情報のみならず生活情報をふくめて満載である⁶³⁾。京城に続いて紹介されるのは、鉄道路線の駅の順番

61) 江口寛治『朝鮮鉄道夜話』二水閣、昭和11年、74頁。

62) 今井晴夫『朝鮮之観光』朝鮮之観光社、昭和14年。（韓国地理風俗誌叢書106、景仁文化社、1995年、に再録）。

63) このガイドでは京城の観光地案内のほかに、それと同じほどの枚幅を割いて、京城における各会社の紹介、業務内容、業績、連絡先などの具体的情報を分厚く綴じている。結果的に京城という都市の可能性を知らせている。旅客のみならず居留日本人の生活ガイド的

である。最初の鉄道路線である京仁線の終点である仁川の、交通案内から始まりその土地の歴史、周辺の観光地の紹介となる。そして京釜線の釜山のページへと続くが、やはり釜山の交通案内、歴史、観光地紹介となり、次に釜山から京釜線で京城に向かう次の主要駅、亀浦、大邱といった順番でガイドが続いていく。仁川や釜山といった交通の要所では、鉄道だけではなく船便や支線や乗り合い自動車などの情報が膨張しており交通情報本のような気分にもなるが、それに続いて周辺の観光地の紹介とそこに行く交通手段なども詳細にならぶ。このように、朝鮮のすべての鉄道駅とその周辺が紹介されるというスタイルであった。

(2) 朝鮮の観光地開発の特徴

総督府鉄道局のイニシアティブによる観光開発であるなら、そして朝鮮の人びとが観光文化にまだ馴染みのない時代であれば、当然、その観光開発が日本人観光客を想定したものになることはやむをえない結果である。

もちろん、日本人が観光してみたいと思う場所と朝鮮の人びとのそれとは、必ずしも異なるとは限らない。たとえば、歴史的遺跡や記念碑、あるいは風光明媚な景勝地などは、たとえば京城の光化門、景福宮慶会楼、現在は世界遺産になっている海印寺や慶州の石窟庵などは、内地からも朝鮮からも、人気の観光地である。これらは日韓併合以前から知られ、日本の古蹟調査等のなかでも注目を集めた場所が多く、観光案内の普遍的かつ基本的な要素となっている。しかし、それ以外に朝鮮の観光案内には、総督府が日本人向けに観光開発していたという特有の特徴があった。以下3つほどを示す。

ひとつめは、温泉観光地の開発である。もともと朝鮮の文化には、熱い温泉に首まで浸かってくつろぐような温泉文化はなかった⁶⁴⁾。昔から居留日本人が多

役割ももっていたことがわかる。

64) 竹国友康『韓国温泉物語』岩波書店、2004年、3-4頁。なお、温かい温泉に浸かるという行為が、日本人の精神誌のなかに位置づけられる可能性について論じているのは、池田貴

かった釜山では、東萊温泉があり、総監府の時代には日本人の経営の旅館があることがわかっている⁶⁵⁾。しかし他には、いわゆる日本人が温泉旅館といえるような宿泊施設はほとんどなかったといっていよい。明治41年の『韓国鉄道路線案内』という観光案内では、太田駅の近くの観光地として、儒城温泉という名称が出てくるにもかかわらず、その説明は「駅の西一里余湯村の田圃中にあるも、何等の設備もなく浴客の跡を絶てり」⁶⁶⁾などとある。これが昭和14年、すなわち約30年ほど後の旅行案内『朝鮮之観光』を開くと、儒城温泉は「ラジウム温泉として有名」という紹介があり、さらに朝鮮名山にあげられる鷄龍山の探勝モデルコースのなかに「儒城温泉に一泊」があり、2軒の温泉旅館が開業している⁶⁷⁾。もう一つ例をあげると、明治41年の旅行案内内の天安駅の説明には温陽温泉の紹介がある。「世祖大王嘗て俗雛山に行幸の帰途発見せしものなりと云う。大王初めて此所に宮殿を建立せりと云うも、今は只其の遺跡を有するのみ」と説明している。ところがその説明の最後には「湯元温陽館、新たに此処に増築をなし、構造結構設備完全す」と、温泉を楽しめる場所ができたことを紹介しているのである。しかし、もちろんそれだけではない。「而して、当鉄道は同所に往復せらるる浴客に対し、期間21日、往復三割引きの乗車券を発売す。なお乗車券所持の浴客に対しては宿泊料その他の諸費二割引の特約あり」、という具合なのである⁶⁸⁾。これが昭和14年のガイドになると、「行け、温泉なら温陽。豪華な設備と卓越せる効能しかも便利」というコピーで、朝鮮京南鉄道経営の旅館神井館の紹介が、2ページ以上にわたってある。この会社が巨額を投じてここ

夫「日本領期の樺太における温泉開発と温泉をめぐる人びとの精神誌」、白木沢編『北東アジアのける帝国と地域社会』北海道大学出版会、2017年、470-475頁。

65) 竹国、同上書、41-46頁。江口寛治によれば、この温泉が「朝鮮の別府」として古くから知られている割には、観光地としての発達が遅々としているため、満鉄時代にここに資金を投じて一大遊園地に開発しようと用地買収に着手したことが記録されている。しかし、一部の地主が買収に応ぜず、遊園地計画は頓挫した。江口寛治、前掲書、260-261頁。

66) 統監府鉄道管理局編『韓国鉄道路線案内』日韓印刷、明治41年、45頁。

67) 今井晴夫、前掲書、268頁。

68) 統監府鉄道管理局編、前掲書、55-56頁。



1930年ごろの温陽温泉

（佐賀県立名護屋城博物館所蔵）



巨岩の山並みの内金剛の景観

（佐賀県立名護屋城博物館所蔵）

が豪華版の温泉郷になったこと、この旅館の庭園のなかに世祖王の遺跡があることなども、説明がある。そして当然、京城からの鉄道路線の説明とともに温陽直通であると割引があることや天安駅からは「スマート」な車両であること

など、宣伝を怠らない⁶⁹⁾。釜山の東萊温泉も、このころには温泉旅館が6軒まで増えている。昭和14年のガイドでは、「温泉案内」というページも組まれており16の温泉地の紹介がある。この間の朝鮮における温泉開発がどれほどかがよくわかる。

ふたつめは、海水浴やスキー場の観光地である。もっとも、朝鮮にも水での沐浴の文化があったし、スキーがなかったわけではない。しかし朝鮮鉄道の時代に開発されたのは、レジャーとしての海水浴やスキー場を開発したうえで楽しむスキーのことであり、これらの娯楽については明治時代の案内にはほとんど記載がない。ところが1934（昭和9）年の『朝鮮旅行案内記』⁷⁰⁾をみると、積雪量も雪質も充分で楽しめるスキー場として7か所が紹介され、滑走コースが緩急変化に富むとか、ジャンプ台があるとか、ヒュッテでのサービスなど、詳細に情報が載せられている。1939（昭和14）年の案内には、夏冬のレジャー情報が各所に記載があり、レジャー目的の観光客を狙っていたことがわかる。いくつか代表的なものを紹介しよう。昭和11年に松島遊園株式会社が設立され、仁川の松島および月尾島公園の娯楽施設、遊園地、温泉、別荘地などの総合開発が行われたが⁷¹⁾、海水浴はそのなかでも重要なレジャーだった。光州地方の木浦でも、建の浦や外の濱といった海水浴場ができています。京元線の元山は大型船舶も停泊できる自然の良港だが、その続きには、白砂青松波静かな理想的な海水浴場がある。そこは元山海水浴会社が経営した海水浴場だが、この会社は沿岸の風光明媚な地域に貸別荘、ホテル、ゴルフ、テニスコートなどの経営も担っていた⁷²⁾。元山周辺にはスキー場もある。元山から内陸に少し入った三坊峽

69) 今井晴夫、前掲書、488-490頁。

70) 朝鮮総督府鉄道局、『朝鮮旅行案内記』朝鮮印刷、昭和9年。218-224頁にかけて、スキーやキャンプといった行楽のための紹介となっている。

71) 今井晴夫、前掲書、191-192頁。仁川府松島が「湘南（鎌倉地方）に似て絶勝の地」との記載がある。

72) 今井晴夫、同上書、334頁。

駅の背後の高台一帯は、夏はキャンプ冬はスキー場として紹介されている⁷³⁾。そこは別に新豊里スキー場という写真もあった⁷⁴⁾。金剛山にも、金剛山電気鉄道の全通以降になると旅館なども増え、春夏はハイキング、冬はスキーとして、温泉旅館に泊まりながらスキーを楽しむ光景もみられた⁷⁵⁾。

注目しなければならないのはその時期である。日本（内地）で、塩湯治や海軍訓練としての遊泳ではなく、海水浴としてのレジャーが湘南や打出などの地ではじまったのは、都市と良好な浜辺をつなぐ鉄道網が広がってから以降、すなわち明治末から大正期であった。1929（昭和4）年に入ると海水浴へのパンフレットが鉄道局から出版されたりして、海浜リゾートは徐々に盛りあがっていく⁷⁶⁾。スキーについていえば、スキーを日本に伝えたレルヒ少佐が日本に到着したのは1910（明治43）年である。ただ、レルヒが伝えたのは陸軍の雪中行軍訓練であったにすぎない。その後これが学校教育に加えられ、スポーツとして急速に普及していくのだが、冬季レジャーとしてはじめて志賀高原のスキー場がオープンしたのは1928（昭和3）年であった。その後、志賀高原や赤倉にスキー場と観光ホテルの建設計画が進み、スキーリゾートとして赤倉観光ホテルや志賀高原温泉ホテルなどが本格開業するのは1937（昭和12）年のことであった⁷⁷⁾。このように内地と朝鮮との海水浴場およびスキー場の観光開発を比べてみ

73) 今井晴夫、同上書、416頁。

74) 今井晴夫、同上書、420頁。

75) 今井晴夫、同上書、406-415頁、金剛山観光については、紙面をとって解説している。金剛山のリゾート開発の全体像については、砂本、前掲論文、90-96頁。金剛山電気鉄道株式会社は1919年に創立。「既に世界の探検家により天下に比類なしとまで唱えられたる雄大な絶勝地」に鉄道を引くことに情熱をもやした久米民之輔は、山岳地帯の開発を乗り越え1931年に開通させた。このあと、1927（昭和2）年には2000人に満たない観光客が、昭和6年には16000人に迫るほどの数を記録している。山崎勝治『金剛山電気鉄道株式会社二十年史』金剛山電気鉄道株式会社、昭和14年。

76) 富田昭次、『旅の風俗史』青弓社、2008年、35-41頁。「東京スキー倶楽部」の創設が大正7年であり、以来各地にスキー協会やスキー倶楽部が創立されていく。このころから昭和の初めまでは、スキー場の風景が絵葉書になっている。赤井正二『旅行のモダニズム 大正昭和前期の社会文化変動』ナカニシヤ出版、2017年、146-147頁。

77) 富田昭次、同上書、51-55頁。



1925-30年頃の仁川の海水浴場と併設されたプール
(佐賀県立名護屋城博物館所蔵)

ると、時間的な差はあまり見られないということなのだ。内地が先で、朝鮮が後追いつる開発という、ありがちな先入観は通用しない。むしろ、日本の最先端の行楽スタイルを朝鮮はほぼ同時に取り入れて実現していったために、「夏はキャンプ、冬はスキー」といった新しいレジャーは、ほぼ同時に双方で普及していったと考えることが自然である。赤倉観光ホテルの事業は、帝国ホテルの会長をつとめた大倉喜七郎が手掛けたものだが、大倉は「スキーを楽しむ富裕階級の男女がやがては帝国ホテルの顧客になるだろうとの計算」⁷⁸⁾があったからか、熱心にスキーリゾート開発に取り組んだという。朝鮮鉄道も、そのような富裕階級であれば、よりよいスキーリゾート地として朝鮮半島まで出かけるのもさほど苦にはならないだろうし、そのような若年層が朝鮮を行き来することは将来の経済活動においてもプラスになると考えたと思われる。実際、元山やスキーや海水浴のような新しい娯楽は、内地朝鮮の違いがなく、帝国全体に広

78) 富田昭次、同上書、54-55頁。

がっていった⁷⁹⁾。

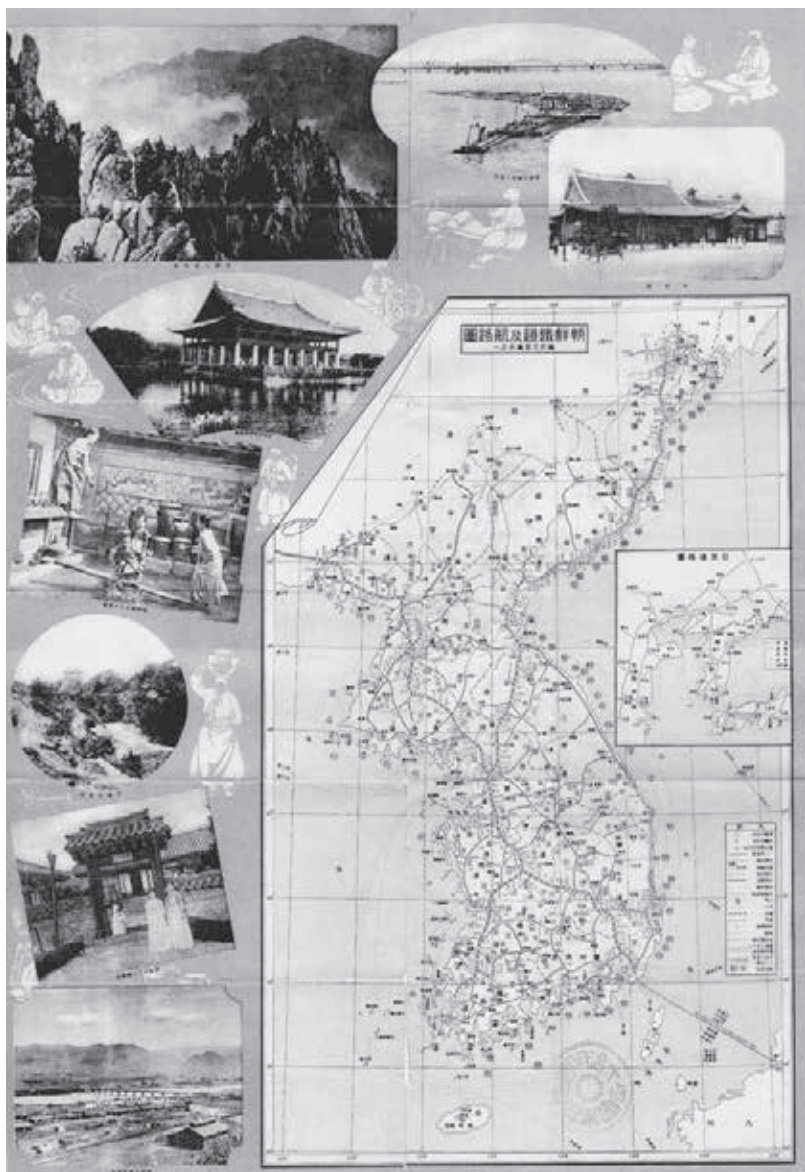
三つめは、史跡・戦跡探訪としての観光である。旅行案内ガイドの各地の紹介のなかで多いのは、史跡・戦跡についての記述である。この記載の量の多さは、朝鮮案内のどの時代をとっても同じであり、史跡戦跡説明が半分以上というケースでさえ、珍しくない。たとえば、京釜線の金海は大和朝廷の任那日本府の所在地だったとされ、朝鮮王朝と並んで紹介されているが、これは金海の説明のほぼ全体なのだ⁸⁰⁾。（もっとも任那日本府が史実としてここにあったかどうかは学術的にはわからない）。京城のガイドでも、梨泰院のところに「かつて文禄の役我兵この地に駐屯せる」とか、南山公園にはやはり文禄の役の際に増田長益が一部の兵を屯営したことや、ここにある神宮および天満宮（倭城台）に湧き出る水が日本人居留地に供給されていることなど、説明されている⁸¹⁾。これはほんの一部であり、文禄・慶長の役の朝鮮出兵にまつわる説明は必ずあり、小西行長や加藤清正などは頻出する名前である。日清・日露戦争の戦跡ももちろん説明されていて、日清戦争の英雄木口小平の物語や日露戦争の英雄原田重吉の戦いが史実として加えられて、戦場観光を盛り上げている⁸²⁾。日清・日露戦争はまだ実体験をもつ日本人がたくさんいるので、感慨を深める日本人もたくさんいただろう。これは日本の歴史を朝鮮半島の旅に重ねることによって、ここが帝国日本であることを意識させるとともに、単なる懐古主義にとどまらず、将来の戦争を想定するならば古跡・戦跡に関心を持つことは現実的な国家的利益であろう。日本統治下ならではの時代状況が、このような特徴をつくりあげたのだらう。加えて日本人観光客が史跡・戦跡を巡っていたもう一つの理由として、小牟田は、「戦跡巡りという大義名分があると観光旅行がしやすい」とい

79) 砂本、前掲論文、97頁。国際観光開発という視点では、内地と植民地が必ずしも垂直的關係ではなかったことが示されている。

80) 一例として、大町桂月『満鮮遊記』大阪屋号書店、大正8年。（韓国歴史地理風俗誌叢書241、景仁文化社、に再録）。73-76頁。

81) 統監府鉄道管理局編、前掲書、98-100頁。

82) 小牟田、『大日本帝国の海外鉄道』87-89頁。



朝鮮總督府發行『朝鮮旅行案内』昭和4年版

う社会全体の雰囲気がある背景にあったことを指摘している⁸³⁾。江戸時代のお伊勢参りが参拝目的だったからこそ自由な旅ができたのと同じように、朝鮮において史跡・戦跡巡りという大義名分が観光旅行の促進に機能していた、というのである。たしかに、単純に娯楽のための旅というのは、ほんの一部の人びとを除けば、まだ社会的に許容できる段階にはなかったのだろう。

(3) 観光宣伝と観光スタイル

さて、鉄道と観光地の整備が進むにしたがい、朝鮮鉄道は旅客獲得に向けて、さまざまな割引サービスをおこない、旅客獲得にむけた体制をつくっていった。温泉旅行について、鉄道局が往復割引などのサービスをしていたことは前述したが、それだけでなく、朝鮮鉄道の割引券は多種多様になっている。学割は4割引。温泉地往復割引・海水浴割引は、週末とそれ以外や、自動車での温泉地への往復も計算に入れるかどうかなど、条件によって様々だが、2割から5割引の切符が用意されている⁸⁴⁾。一大観光地に育った金剛山においては、往復及び回遊乗車券があり、個人では3割引、団体では人数によって4-5割引というありようである。団体割引については種類が数多く、内地朝鮮間、朝鮮満州間、往復か周遊かによって、それぞれに団体割引及び往復割引が設定されている⁸⁵⁾。

個人旅行は安全的にも価格的にも条件が悪く、この時代は団体旅行が主流であった。団体パッケージ旅行である。初めて訪れる外地であるから、団体旅行が特に好まれたのだろう⁸⁶⁾。日本各地に興味や目的に合わせてさまざまな旅行団が立ち上がったのは大正期が中心で、1924（大正13）年に日本旅行文化協会が設立された際には、すでにその主要な構成員になっている⁸⁷⁾。全体像は不明であ

83) 小牟田哲彦、『明治・大正・昭和 日本人のアジア観光』草思社、2019年、30-32頁。

84) 今井晴夫、前掲書、22-25頁。小牟田、『大日本帝国の海外鉄道』137-147頁。

85) 小牟田、『大日本帝国の海外鉄道』142頁。

86) 小牟田、『明治・大正・昭和 日本人のアジア観光』37頁。

87) 赤井、前掲書、54-60頁。

るが、朝鮮満州への旅行団もあったことが予想される。とくに各地での実業家たちが視察旅行をしたケースは、よくみられた。その際には、温泉地や史跡探訪などは観光ルートとして好まれた。

さらに学生の視察旅行・修学旅行も多かった。帝国大学、師範学校など、日本の将来を担う学生たちの視察旅行・修学旅行は、1900年代後半からは、文部省と陸軍省が推進する形で進められた⁸⁸⁾。もちろん、戦跡巡りなどは日本の歴史を肌身に感じながら学ぶことになるが、それは同時に、帝国の在り方やこれからそれぞれが奉仕する役割を刷り込ませるものであったことも確かである。昭和8年の九州帝国大学学生視察団の朝鮮満州旅行の記録を見ると、各地の史跡や文化施設をめぐりながら、現地の政治家や起業家など成功者たちの講演を聞くというセットで、各地を回っている⁸⁹⁾。そのなかで、学生は、「朝鮮最古の開港年釜山といっても、内地と同じようでなんといいことはなかった」とか、京城においては朝鮮総督の講演を聞き名誉な気持ちになったことを記録したり、「さすが文化施設の整わぬところ何一つなし」⁹⁰⁾とその博物館を記録し、おおいに共感している。官臣の養成事業とでもいうべきだろうか。この類の修学旅行は、1920年代に益々増加する⁹¹⁾。

ところがこう論じると、さぞ多くの団体旅行客が朝鮮に集まったかのような印象があるが、実際はそうでもない。たいていの視察旅行や修学旅行は、朝鮮から満州や黒竜江省などへも回るルート計画を持つものが多く、鮮満旅行だったからである。先の九州帝国大学学生の朝鮮満州旅行にしても、下関から釜山に着くものの釜山では夕食をとっただけで、夜には汽車に乗り京城に次の日の朝7時に着く、といった行程である。その日は京城で朝鮮総督府や博物館な

88) 李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」『北東アジア研究』13号、2007年、154頁。

89) 九州帝国大学学生視察団『朝鮮満州旅行』九州帝国大学配属将校室、昭和8年。

90) 九州帝国大学学生視察団、同上書、66-74頁。

91) 李良姫、前掲論文、156頁。1920年5月の記録では団体旅行客のほぼ4分の3は、学生団体になっている。夏休みや冬休みにはない時期でもこれほどであった。

どを見学観光するが、その日の夜にはまだ車上の人となり、次の朝に汽車を降りるのは奉天、ということになっている。朝鮮旅行はするとしても朝鮮は通過点であり、留まることが多くはない。これでは朝鮮鉄道の利益として上積みがあるとしても、充分ではない。このため朝鮮内の観光開発は、継続して進めていかなければならなかった。

このような状況のなかで、博覧会は朝鮮旅行の行き先として広報されていく。旅程の一部に博覧会が組み込まれる場合もあれば、目的地として旅行計画されることもあった。それで少なくとも一泊は旅客滞在を留めることができる。総督府鉄道局局長の、朝鮮博覧会記念放送の言葉によれば、「例年ならば昨今すなわち9、10の2か月は、官私鉄道合わせて1日6、7万人の旅客を輸送するに過ぎないのでありますが、この頃は約8万人に及んでいるばかりでなく、10万を超ゆる日さへ珍しくないであります。京城に乗り降りせらるる旅客の数は、普段の日なら7、8千人内外のものでありますが、このごろは2万4、5千人にも達しているのであります」⁹²⁾との成果を演説する。この博覧会観光客に対応するために、朝鮮鉄道は50両ほどの新規発注したり、補修車両を急がせたり、荷物車を改造して畳式客車にしたりして、総計で800両客車を用意し、かつ昼夜ともに臨時列車を大增発した。その博覧会の年にかかる朝鮮鉄道の意気込みは並々ならぬものがあった⁹³⁾。

それにもかかわらず、朝鮮鉄道の営業収支はめざましい改善はなかったといえる。始政5年記念朝鮮物産共進会のあった1915年の営業収支はわずかに増えただけだったし、1929の朝鮮博覧会の際には対前年比118%になったものの、その後はまた旅客も利益も縮小にみまわれて⁹⁴⁾、総督府からの支援額に匹敵するほどの営業利益を上げることは到底できていない。とはいえこの機会に、汽車の

92) 大村卓一「朝鮮鉄道の今昔」、朝鮮総督府鉄道局編『朝鮮鉄道論纂』朝鮮総督府鉄道局、昭和5年、123頁。

93) 大村、同上書、124-125頁。

94) 高橋泰隆、前掲書、83頁。

インフラ投資や設備改善が進められ、旅客自体は確実に拡大しつづけているし、朝鮮物産共進会のあった年には旅客実数がはじめて500万人を超え、朝鮮博覧会のあった年には2300万人を超えている⁹⁵⁾。博覧会は朝鮮鉄道と観光客誘致に役だってはきたが、一種のカンフル剤にすぎなかったことがうかがえよう。やはり観光にとっていつも重要だったイベントは、史跡探訪とその周りにある博物館見学であり、内地と同じく楽しめる温泉や新しいレジャーだった。

(4) まとめ

総督府のこのような観光地開発の特徴をまとめるならば、あくまで帝国日本の必要と価値観で進められた朝鮮全道の開発であったということになろう。内地から外地への観光すなわち、あくまで内地の人間が求める帝国の再発見であった。日本での行楽の延長として設計されたうえで、観光地が次々につくられたとってよいだろう。つまり、異なるものを見聞して学んでいく旅ではなく、内地と同じ娯楽を、内地よりも安く優雅に、が求められたのである。これがまさに、帝国の植民地へのまなざしであった。これを「朝鮮総督府が積極的に観光開発をしたのは、植民地政策の宣伝のためであり、それは植民地化を正当化することにもつながる独善的なものだった」⁹⁶⁾と考える研究は多い。

しかしそのような見方と同時に、鉄道を維持することが産業発展と観光の発展のためには不可欠であり、その逆もまた真であり、それらは総体として朝鮮半島の近代化の基礎をつくった事実を、見逃すべきではない。朝鮮鉄道局と観光を進めた人々は、政策の正当化のためというより、その経営を維持するためには内地並みの鉄道と観光を朝鮮に実現しようと努力せざるを得なかった。その結果、新しいレジャーに対応する観光地にかんしては内地に後れを取らないほどに進められたのである。この開発は、朝鮮に住む外国人および成功した朝

95) 朝鮮総督府鉄道局『朝鮮鉄道四十年略史』朝鮮総督府鉄道局、昭和15年、564頁。

96) 李良姫、前掲論文、162頁。

鮮人にとっての、保養や別荘地開発を兼ねることにもなった⁹⁷⁾。内地や在留日本人だけではなく、朝鮮経済も観光開発から利益を得ていたことは事実である。こうして、朝鮮半島の国際的な観光産業の基盤は整ったといえよう。朝鮮独立後は、日本人職員が帰国したことにより、朝鮮の現地職員に鉄道運営、観光名所、温泉施設などはそのまま引き継がれ⁹⁸⁾、韓国政府に利用されることにより、戦後ツーリズムが発展していくことになった。

もともと戦後になると、日本の古戦跡は大日本帝国暴力の痕跡として、物語は読み替えられてはいくのだけれども。

5 帝国と植民地——関係の多様性とエキシビション

本稿の全体を振りかえり、1910-1930の朝鮮におけるエキシビションについてのまとめとしたい。

日本や欧州ではしばしば、19世紀末から20世紀初頭にかけて開催された博覧会があり、そのために収集された資料の保存場所として博物館が作られることが多い。そして博物館は、帝国の力を背景とした博物学的まなざしで帝国にとっての世界を編集し展示する場所でもあった。

これに対して、朝鮮における近代的博物館は、朝鮮半島における調査と発掘の歴史のもと、遺物の保存への学術的関心がすでに存在していたなかでその設立が決定されたものであり、しかも朝鮮のなかの遺物を朝鮮内で保管管理しようとするものであった。李王家博物館、総督府博物館、朝鮮民族美術館のいずれも、である。総督府博物館だけは、収集品の展覧のきっかけが博覧会であったが、その内容は博覧会以前にすでに準備されていたといつてよい。博覧会も

97) 砂本は、日本統治下におけるリゾート地開発が、日本人のみならず宣教師を中心とする外国人居住者や外国人観光客をも視野に入れ行われていたことを論じている。砂本、前掲論文、71-100頁。

98) 李良姫、前掲論文、160頁。

しかりである。植民地内で開催される博覧会は、内地の農工産物などを展覧するのと同等以上に、朝鮮におけるそれを展覧することになり、朝鮮の人びとみずから朝鮮という地域を知るきっかけをつくったといえよう。博覧会における賑わいは、その娯楽性を經由することによって、朝鮮内の様々な社会的葛藤を穏やかにすることに役立った。それは一方的に朝鮮の人びとが教化されたという側面だけでとらえられるべきではなく、総督府・在留日本人・朝鮮の人びとそれぞれが社会的場面で抱き続けた違和感を、多少和らげながら、近代化の素地を固めていったと考えるほうが的確ではないだろうか。

観光は鉄道局の総力で進められ内地の旅客の拡大をめざしたが、ここにおいて、「内地が進んでいて植民地は遅れている」という先入観は通用していない。観光地は顧客層である日本人をふまえて開発されたことは確かである。温泉開発や当時富裕階層の若者たちに人気のスキーや海水浴などは、朝鮮で形成されつつあった朝鮮人の中間層以上の人々にとっても、新しい時代の魅力として広報されエキシビションされていた。その結果として旅客需要が高まり別荘地開発なども進んだことも事実である。内地か朝鮮かという区別以上に、近代化とそれに付随する娯楽文化の醸成がここにはあった。

このように植民地朝鮮のなかで展開された帝国の権力とエキシビションの関係は、多様な方向のベクトルが混在しながら起動しているのであり、ひとつの定型におさめることはできない。博物館・博覧会・観光のそれぞれの場面で、総督府の政策、居留日本人社会、朝鮮社会、そして日本社会は、それぞれのコミュニティを超えて具体的な接触を継続的に繰り返していた。エキシビションがそれらの具体的な相互作用の現場として存在したからこそ、異質な人々の間の協力と理解は軋みながらわずかでも進むのであり、それらの複雑にからみあったダイナミックな関係性のもとに、朝鮮の近代化が進んでいったことは確実なことである。

(丁)